

葛原妙子「再び女人の歌を閉塞するもの」を読む

初出：「短歌」1955・3 / 昭和30

1、議論の発端〈女流の歌は旺んになりつつある〉ときの不満

〈折口氏がかつて「女性の本質にかなった短歌」を説くでだてとして使はれた「女歌」という言葉が、暗黙のうちに、或種の女流歌人の作品を指す合言葉となつてゐるらしく、しかもそれらを一括して「不誠実な作品」といふ折り紙がつけられようとしてゐる事実〉に対する不満。

☆「再び…」は現代の「女歌」は「不誠実」であるという男性歌人たちからの指摘に対して、その「誠実さ」を弁護し、反駁する形式で書かれている。

2、「女歌」への同時代的な批判…尾山篤二郎、山本友一、近藤芳美

①尾山篤二郎「女人歌の在り方」（「短歌研究」1954・10）への反論。

…〈君子、節婦の誠実、ないしそれを志す者にしか歌は作れぬ〉

㊦…生き方の問題は〈「文学」への誠実〉とは一応切離されて良い。「文学への誠実」を自分なりに貫いた中城ふみ子とその作品を弁護。

②山本友一「素朴な清新さを」（「短歌」1954・12）への反論。

…〈言葉を痛めつけた佷屈した語法、肉体をくねらせたようないやらしい表現、何の事かわからない比喻、ひとりよがりの観念、何か無理に存在を主張したような態度、周囲に対する好意のこもらない目、肉親を素材に扱ふのがまるで恥と思つてゐる様な口吻…（中略）…つねに何かに追はれ、何事かに執着してゐる私達の心のうごきには清新さといふものがまったくといって良い程失はれてゐる。それだけに求める方向はおのづから定まり、郷愁の様に素朴な清新さを求めてやまないのである。〉

㊦…〈戦後の女性の内部に、氏の見知らぬ乾燥した、又粘着した醜い情緒があるといふのは事実である〉、また〈今迄の短歌的な情緒とはやゝ異質なものが、別に生まれてゐる〉。しかしそれを表現することと、〈作家としての非良心や、不誠実〉を指摘されることは別物。

↓

むしろ、〈さうした醜い情緒を、短歌としての限界を守つた上で例えば「硬質美」とか「感想美」とか「浮薄美」とか云ふものに定着しようとする努力〉が必要。

つまり「醜さ」を直視し、それを新しい「美」に結実させることを葛原は求めた。

③近藤芳美「女歌への疑問」（「短歌」1954・12）

㊦…現在の女流歌人のすべてが、氏の文章に拘りすぎて作品を作るならば〈女人の歌は再び閉塞の運命に見舞はれはしないか〉との危惧を表明。

近藤…〈制作と云ふことは他の芸術型式と同じやうに、一つの「物」を作ると云ふ冷たい理知の操作を意味する。けれども女性歌人は、〈自分の気持を、自分のいのちを恣いままに歌ひ出せばよいと云つた簡単な創作態度があり〉、〈作品を自分から一つの客体として切り離す、峻厳さを己れに課して居る人たちは本当に少い〉。結果、作られた歌は〈歪んで奇形児めいた流行的な「女歌」〉となる。けれども〈二十代から三十代にかけての女性作者の作品は立派で〉、〈一様に清らかであり、知性に満ち、それで居ながら一種の悲哀感が流れて居る〉。

※男性の歌と女性の歌を切り離し、さらに30代以上の女性歌人とそれ以下の女性歌人を切り分ける。30代以上の女性歌人の歌が孤立。

㊦…近藤の言葉を要約すれば〈中年の女流歌人の作品は、三十歳以下の女流歌人の作品に比べて思想性が乏しく、従つて社会人としての自覚や連帯感を欠き、立派とは云へないといふことである。そしてそれらの中年婦人の作品は、多くの人間の原始性に繋る感性的な情緒を内容としてゐる事について指摘されてゐる〉。

3、近藤論への反論—その理論的筋道

【反論①】 近藤は、女性の直面する諸条件を度外視している。/ 近藤自身の認識不足。

女性の直面する身体的・社会的条件…女性の表現は〈「みごもり」とか、育児とかに、大きくかかはつてゐるのではないか、と思はれる〉また〈「家族制度」といふ厚い壁〉が〈自我を著しく屈折せしめる〉ことを考慮に入れる必要がある。

中年女性 ⇔ 若い知的な女性（男女同格の知性を身につけ、家庭の束縛を意識せず済む）

↓ ※批判的〈心身男性への近似化〉を図つて〈女性の本質の否定〉する点。

↓

☆〈粘着したもの、臭気あるもの、ひしがれ歪んだものの一切を含み、かつ吐くがよいと思ふ。〉として中年女性の表現を弁護し、一個の指針を与える。さらに「男性化」する「若い知的な女性」への批判をする。

【反論②】 「写生派歌人」の認識不足では？情的・感性的な要素の強い作品でも、忌避されるいわれはない。むしろ・・・

㊦・・・〈特に客観的な作風を重んずる作風の人が、主観的・感性的な表現の中に含まれてゐる知性を、案外に見逃し勝たのではないかといふ懸念〉を持つ。

・あたらしきごみ穴に落つる西瓜の皮の青赤ら/陥ちこめばふと恐ろしき

〈作者の殺戮の不安と予想する知性が鋭く働いてゐると思ふ。そしてこのやうな時に、女性の天与の感覚が物を云ふ事が多いのである。〉

↓

〈女性が作品を作るときに、或ひはマイナスとなり易いのではないかと近藤氏が考へてをられるところの女性の本質が、かへつてプラスとなつて強く働くのである。故に女性はこの感覚といふ天与の武器を、善用すべきであると思ふ。〉

☆〈女性の天与の感覚〉が未来を透視する「知性」に至る道を指摘している。〈主観を伸張した発想を許す時に、男性とは違つた特色ある文学を作るものであらう〉と言う。

【反論③】 従来のリアリズムに並び立つ方法があるのではないか。

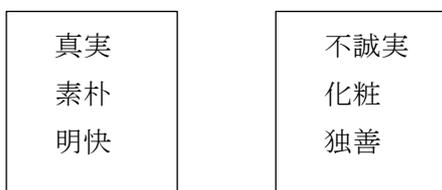
㊦・・・〈現実直視の作品とは、直ちに現象（事実）を写し取つた作品ではない筈である。すべての芸術作品の意味は。現象を通じてその中の「真実なるもの」を取り出すことにあるのであり、それが真のリアリズムであると云へよう〉

↓

①「客観的描写」（写実主義）・・・今までの概念では、リアリズムと考えられていたもの。

②「主観的表現」（反写実主義）を評価、重要視する。

写実 VS 反写実 = ○男性歌人 VS ×女性歌人
折口：「アララギ」 「明星」



↓

㊦・・・〈化粧、即ち「演ずる要素」は、あながち歌壇で云はれてゐる一部の女流歌人の特性ではない、〈作家の多くが多かれ少なかれ持つ要素ではないだらうか〉という。女性歌人の優位性を言うのでなく、「真実」を探り、「誠実」を現わす作家の普遍的な性質として、「演ずる要素」を定置する。

4, レポーターのコメント

○対立軸の整理

- 1、男性歌人 (A) に対する、女性歌人 (B)。この立場からの反論。
- 2、写実主義 (X) に加えて、反写実主義 (Y) の提唱。(X、Yともに「真実」に迫れる) ……Yを実現するには、A、Bは関係ない。しかしBの〈女性の天与の感覚〉はYの実現に優位かも知れない、と葛原は主張した。

○女性性の「本質」化による「普遍」(男性性)への抵抗。

葛原は「感覚」といったものに女性性を見だし、それを「砦」として拠ることで、男性歌人を超えようの道を示唆した。ゆえに男性化を目指す三十代以下の女性歌人は、むしろ批難の対象になる。(※ただし性が文化、社会的に構築されると考えるジェンダー論的な観点からすれば、このような女性性の「本質」化は批判の余地がある。)

○「清潔」/「不潔」を決めているのは？「理知」は万能か？

葛原は〈案外に汚いものを生む〉理知もある。清潔/不潔は誰やらが決めた恣意的な境界ではないか、と「境界」を決める「力」、「理知」に対して疑問を投げかけた。

○「閉塞」という言葉を用いることの戦略性

石川啄木「時代閉塞の現状」(1910・8)

・・・国家の強権を前に閉塞する青年の未来を嘆く。

折口信夫「女流の歌を閉塞したもの」(「短歌研究」1951・1)

・・・現実主義が放逐した「女歌の伝統」を嘆く。

などの短歌史における歴史的な「語り口」を借りることで、専制的な巨大な「力」の存在 (VS 写実主義、VS 近藤芳美) を告発し、圧迫、抑圧されているものの正当性を説明する。

※参考資料 本論の主要登場人物 参照『現代短歌大辞典』(2000、三省堂)

葛原妙子 (1907～1985) 第一歌集は『橙黄』(1950)

「潮音」。太田水穂、四賀光子に師事。49年に女人短歌会を結成。

尾山篤二郎 (1889～1963) 『さすらひ』(1913)

明治40年頃、「新声」、「文庫」などに投稿を始める。その後、古典研究、評論などで毒舌家として活躍。

山本友一 (1910～2004) 『北窓』(1941)

「国民文学」、松村英一に師事。戦後、新歌人集団に参加。「現実重視の写実を学ぶ」という。

五島美代子 (1898～1978) 『暖流』(1936)

「心の花」で出発。”母の歌人”として著名。「女人短歌」に参加。

近藤芳美 (1913～2006) 『早春歌』(1948)

「アララギ」から出発。新歌人集団(1946)、同年「新しき短歌の規定」を発表。「未来」を1951に創刊。